HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	候孝賢映画研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	龔, 金浪
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15243号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87749
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jinlang_Gong_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：龔　金浪

	主査　教　授	応　雄
審査委員	副査　教　授	阿部　嘉昭
	副査　准教授	浅沼　敬子

学位論文題名
侯孝賢映画研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

侯孝賢映画に関する先行研究は主として中華圏、フランスをはじめとする欧米、そして日本でなされてきた。先行研究の言説には概ね二通りがある。ひとつはもっぱら台湾の歴史や、急速に遂げられた近代化による現代台湾社会の変容、台湾人アイデンティティの揺らぎといったコンテクストに関連付けて侯孝賢作品を解釈するカルチュラル・スタディーズ的アプローチである。いまひとつは、映画作品をあくまで映画芸術、美学の次元に還元し芸術的創造の問題として取り扱うものである。後者のアプローチを取る本研究は、この側面に関する先行研究に見られた不十分さを意識し、フィックス・ショットやロング・テイク、ロング・ショットの多用、それらと連動しての物語の筋からの逸脱的表現といった映画表現の諸事象を考察する。それだけでなく、『フラワーズ・オブ・シャンハイ』での「隠れる」ことをめぐる分析、『黒衣の刺客』に見られる、シチュエーションの描写と行動の描写のこれまでにない関係性の脱落など、ジル・ドゥルーズの映画哲学では括り切れない事例の魅惑も語った。本論文は高い精度を有する画面分析と映画学的発見によって一定の新規性を備えている。

また、侯孝賢映画をめぐる従来の美学的視点による研究は、1980 年代から 1990 年代半ばまでの前期作品への偏向が見受けられるが、本研究は前期作品とほぼ同等の比重で近年までの後期作品をめぐる考察を行っている。後期作品に見られる侯孝賢の作家性の進展と変容にたいする肉薄が、本論考のオリジナリティのひとつをなすものでもある。さらには、『風櫃の少年』と『フラワーズ・オブ・シャンハイ』をめぐる考察では、沈従文、張愛玲など近代中国文学者の思想・作風との関わりも視野に入れ、それらが侯孝賢作品のナラティブと映像表現を内在的に機能させるファクターとして検討されている。こうした配慮も、本研究に奥行きをもたらすものとして評価に値する。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本研究が上述の諸点において充実した成果を上げていると評価する。一方、論文に残る改善すべき点についても具体的に指摘した。

侯孝賢映画における映像表現や物語叙述をめぐる具体的かつ緻密な分析に徹底している本論文のアプローチの一貫性、およびその論証の精度に目を見張るものが多々ある一方、その一貫性ゆえに分析が画一化する箇所も散見された。また、形式的側面以外に着目されてしかるべき事象についての吟味・検討が若干不足している。侯孝賢とともに台湾ニューウェーブを築き上げた世界級の映画作家エドワード・ヤンとの映画史的協働関係、および両者の表現上の異同についても触れられていない。侯孝賢の作中人物の話す台詞に「国語」（標準語）と「台語」（台湾語）の混用が顕在するが、このことは侯孝賢スタイルの形成に一翼を担うものでもあった。カメラワークや編集といった映像表現の面をめぐる考察に焦点を絞る本論では、この点についての言及があまり見られない。本論文は七つの作品論によって構成されているが、代表作と一般に目される『悲情城市』が脱落しており、論文の取り扱う作品を選定するに際し執筆者が考えた判断基準・根拠に関しても、より明瞭にすべきである。さらには、論文の一部の記述に中国語の文章表現がそのまま残っていることや、『フラワーズ・オブ・シャンハイ』に関する論考で小説原作と作中人物の台詞に関わる呉方言、上海弁、蘇州弁にたいする監督の対処についての説明、『黒衣の刺客』における遅速の弁別のできないアクションシーンの瞬間挿入、殺そうとする主体と殺されようとする客体のあいだの隠された恋愛模様など、考察すべき点がさらに残されている点も、審査委員会は詳細に指摘した。

審査委員会はこれらの問題点は、映画表現面をめぐる分析に徹する本論文の学術的価値を妨げるものではないと判断する。口頭試問では、上述諸点についての指摘を受けた学位申請者は、侯孝賢研究の今後の展開について、具体的な画面分析を継続する一方、その映画作品全般に関わる映画史や社会、文化の諸方面の問題にも目を向けていく意欲を示した。以上を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。